

第3回星野立子賞

『青麗』

高田 正子

剪定の一枝がとんできて弾む

春コートから花びらのやうなもの

ものの芽の香をたしかめに来たりけり

ちと云うて炎となれる毛虫かな

見ゆるものみなかげろふにほかならず

巴里の地図貼り付けておく冷蔵庫

一羽づつしづまつてゆく春の星

家事一切言ひおいて出る涼しさよ

冬日濃きところにひとりづつ仲間

それぞれの灯にみんなある夜の秋

よく枯れてたのしき音をたてにけり

未草真昼の水を起ち上がる

まつくろに枯れて何かの実なりけり

風花やあてずつぽうに曲がる角

あをあをと山きらきらと鮎の川

月の道いつかひとりになる道よ

母もまた母恋ふるうた赤とんぼ

縁側に日のまはり来る子規忌かな

喪の家も枯れゆくものそのひとつ

討入の衣裳一式年の市

父に湯たんぼ父に家捨てさせて

ほほという口して三人官女かな

母若し春あかつきの夢の奥

さつと来て緑雨の傘をたたみけり

灯せば人還りくる桜かな

雨よりもしづかにしだれざくらかな

銚の稚児雨の袂を重ねけり

家一つ呑んでいよいよ蔦青し

あをぞらの届かぬところ凍りけり

氷上を若き白鳥走り出す